

東御市美術品取得審査委員会会議次第

日時：令和３年２月12日（金）13時30分から

場所：市役所本館２階第三委員会室

1 開会

2 委員長あいさつ

3 審議事項

（１）令和２年度丸山晚霞記念館の美術品取得（案）について

①作品名：「山村の娘」（仮題） 作家名：丸山晚霞

（２）令和２年度取得（寄贈）美術品（案）について

①梅野記念絵画館取得（寄贈）美術品

５作家６作品

（３）その他

4 閉会

No.	作者名	作品名	制作年	技法・材質		サイズ (mm)
1	丸山晚霞	山村の娘(仮題)	1900年以前	水彩	紙	430 × 350

取得額 300,000円



【佐藤聡史 丸山晚霞記念館館長(学芸員) 説明】

本作は、米国において出品されていたものを、個人が購入し所蔵しているものである。「B.Maruyama」のサインは丸山晚霞の初期のスタイルであり、1900年の渡米時に現地で売却された可能性が高く、渡米前に描きためた信州の風景であろう。

手前から奥に伸びる大きな建物は寺院などではないかと思われ、建物と木柵の間には水路と思われるものが描かれていることから、地元・祢津地区の西宮あたりではないかと推察される。また、右下にある植物(おそらくは蓼の葉であろう)は、他の丸山晚霞作品にもよく描かれており、描写が同一である。人物についても初期の作品に見られる面長の特徴が見られる。

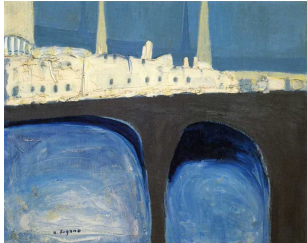
さらに額装については、1900年にボストンでの展覧会で使用された記録写真にあるものと同一の仕様と思われ、裏にはコネチカット州の画商が直前まで取り扱っていたことの判るシールが貼り付けられている。

裏貼りを剥がさねばならないが、画用紙裏に丸山晚霞自身もしくはアメリカでの販売に付された番号等が記載されていると思われる。

丸山晚霞の評価は近年の水彩画ブームと、他館展覧会への貸出などから着実に高まっており、特に初期の作品は丸山晚霞記念館が収蔵するべきものである。

【林誠 長野県立歴史館学芸員 説明】

取得までの来歴がはっきりしていること、出所が明確であること、それらが画風と矛盾していないことから、真筆の条件を全て備えていると考える。

No.	題名 / 作家	年代	技法	サイズ	写真	寄贈者	評価額(円)
1	冬瓜 冬青小林勇	1960	着彩 紙	52.0×69.0		小松美沙子	500,000
2	籠・果物 冬青小林勇	1970	着彩 紙	68.0×46.0		小松美沙子	500,000
3	故郷のスター マイン 横井弘三	1964	油彩 板	91.0×117.0		美術研究 藝林 (代表佐藤 雅子)	5,250,000
4	哲学の橋(ハ イデルベル ク) 菅野圭介	1953	油彩 キャンバス	20号 F 60.4×72.6		美術研究 藝林 (代表佐藤 雅子)	3,150,000
5	赤い屋根 (シャルトル 水辺) 河野扶	1972	油彩 キャンバス	12号 F 50.0×60.0		美術研究 藝林 (代表佐藤 雅子)	750,000
6	葡萄 本荘赳	1970	油彩 キャンバス	6号 P 28.0×41.0		佐藤修	400,000

丸山晚霞および関連作家

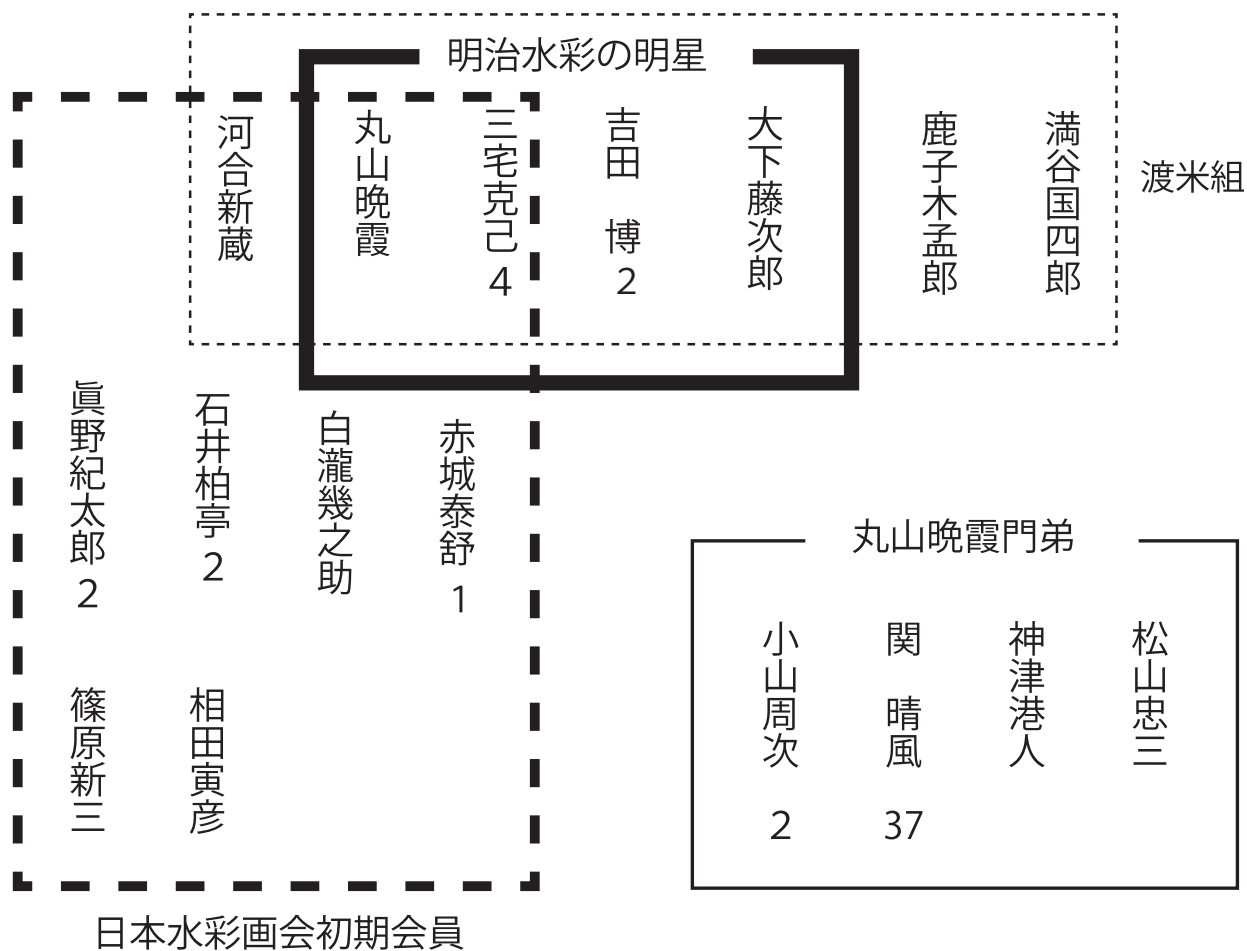
洋画指導者	
本多錦吉郎	小山正太郎

丸山晚霞重要作品数（種類別全点数）

日本アルプス写生旅行デッサン 40（499）

1894 年～1912 年の水彩画 55（95）

参考：掛け軸 15、屏風 4



明治の水彩画を丸山晚霞を中心に体系的に収集する

- 1 丸山晚霞の最盛期とされる 1894 年～1910 年までの水彩画
- 2 同時期の水彩の明星と呼ばれた作家 特に三宅克己、吉田博
- 3 日本水彩画会初期会員

丸山晚霞略年譜と作風の変遷

	1867 年（慶応 3）	信濃国小県郡祢津西町生まれ	
修業期	1888 年（明治 21）	上京し、「彰技堂」で本多錦吉郎に師事	習作の域を出ない。資料価値として重要
最盛期 1894 年（明治 27）～1910 年（明治 43）	1895 年（明治 28）	沼田付近で吉田博と出会う	水彩画に開眼。吉田博の影響が大きく、風景を忠実に画面に表現しようとする。
	1898 年（明治 31）	吉田博と「日本アルプス写生旅行」を行う	「信州の空気が画面に漂っていて、見る私たちをして浅間山の山麓に引きずられていくような力強さを感じた」三宅克己評
	1900 年（明治 33）	盟友 4 人と渡米、現地で吉田博らと合流。3 都市で「日本人水彩画家 6 人展」を開催し、大成功を収める。約 100 点を販売。	渡米前に、三宅克己と知り合う。海外の影響を受けた三宅克己の作風に影響を受ける。
	1901 年（明治 34）	アメリカから渡欧し、欧州を巡遊し帰国	
	1902 年（明治 35）	太平洋画会（現太平洋美術会）の創立に参加。小諸義塾図画教師に着任	欧州の田園画家のライフスタイルに憧れ、田園風景、農村風景に秀作が見られる。島崎藤村らと交友。文学にも影響を与える。
	1905 年（明治 38）	小諸義塾を辞し上京。太平洋画会研究所の水彩画科教師となる。その後大下藤次郎らと水彩画講習所開設。	水彩画全盛期を迎え、著書も手がける。「和装水彩」と称した、掛け軸を精力的に描く。秀品も見られる。
円熟期 1911 年（明治 44）～1920 年（大正 9）頃	1911 年（明治 44）	2 度目の渡欧。欧州各地で写生を行う	ウィリアム・ターナーに影響を受けて帰国。画風が変化する。
	1912 年（明治 45・大正元）	帰国、帝国ホテルで滞欧作の展覧会を開催	欧州風景は現存多数。秀品は 3 割程度か。
	1913 年（大正 2）	日本水彩画会創立	後進の指導や水彩画の普及に奔走する。掛け軸などを多作。現存多数。作風は平凡。
晩年	1923 年（大正 12）	関東大震災救済義援金を募るため、中国、東南アジアで作品を頒布	このころから、指導者として多忙を極め、作品は衰える
最晩年	1936 年（昭和 11）	吉田博らと日本山岳画協会の創立に参加。郷里祢津村にアトリエ「羽衣荘」を新築	
	1942 年（昭和 17）	死去。享年 76。日本水彩画会から「水彩画家丸山晚霞」（遺稿集）が刊行	